

〈連載〉

写真・文：飯沢未央

コンビニから考える『文化と生物学』 第3回

チキンの性別を考える

コンビニを通じたこれからの食についてのゆるやかな考察、第3回目。今回は、私自身のアートプロジェクトについて紹介する。きっかけは、コンビニのホットスナックコーナーに並ぶ、「フライドチキン」だった。



Figure 1. コンビニのレジの横で販売される、様々なチキンたち。それは今や、すっかり私たちの日常の風景と化している。

何気なく立ち寄るコンビニで、つい手を伸ばしてしまうホットスナックのチキン。サラダチキン、冷凍の唐揚げまで含めれば、私たちの日常はチキンで溢れている。だが、その肉の塊たちが、かつてはオスだったのか、メスだったのか。そんなことを気にする人は、ほとんどいないだろう。

そこで私は、コンビニのチキンのDNAを解析して性別を判別する、バイオアートなプロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトを『the Male or Female』と名付け、その研究過程と成果を一冊のプロジェクトブックにまとめている。



Figure 2. 『the Male or Female』のフォトブックを開いた状態。ページの裏に性別の判定結果が記されている。



Figure 3. 『the Male or Female』ブックセット。チキンの性別判定を記したフォトブック、プロジェクトの記録をまとめたコンセプトブック、そして縮小版の実験ノート（3冊）からなる。

当初、プロジェクトは「チキンの DNA から生前の姿を復元する」という、別の構想から開始した。その可能性を探るため、広島大学の都築政起教授（家畜育種遺伝学）に話を伺った。教授によると、鶏の DNA 研究はヒトなどに比べてまだ発展途上であり、外見のような複雑な情報を読み解くのは難しいとのことであった。一方で、2016 年当時、ほぼ確実に判別できる数少ない要素として「性別」がある、というお話を聞いた。この話をきっかけに、チキンの性別を判定するプロジェクトに切り替えることにした。

私たちはスーパーで肉を買うとき「国産か」「もも肉かむね肉か」は気にするが、その肉がオスかメスかなんて、ほとんどの人は気にしない。なぜ食肉の性別は、これほどまでに“無視”されているのだろうか？

この問いをきっかけに、本格的に実験を始めた。まずはサンプルの収集ということで、コンビニやスーパー、ファーストフード店を巡っては、唐揚げやサラダチキンなど、あらゆるチキンを片っ端から買い集めた。そして、それらの肉片から DNA を抽出し、性別を判定するという地道な実験を繰り返した。このために、metaPhorest[1] でお世話になっている岩崎研究室のバイオラボを使わせてもらい、仕事の後、行ける日はラボで実験する日々が続いた。間が空いた時期もあったが、トータルで 1 年半ぐらいは通っていたと思う。暇だったのか……。今、当時を振り返ると「よくやっていたな」と自分でも思う。

実験を繰り返した中で、印象に残っているサンプルがある。友人から譲ってもらった「親鶏」の煮物だ。当然、結果は「メス」。でも、その結果を見た時、何とも言えない気持ちになった。なぜなら、数ある鶏肉の中で、卵を産む役割を担うこの「親鶏」だけが、その性別を前提として、「母」や「女性」といったイメージを背負って流通している。その事実、あらためて気づかされた気がしたからだ。

プロジェクト発表後、『the Male or Female』ブックセットは、いくつかのアートブックショップで取り扱っていただいた。またプロジェクトの展示としてもお声がけをいただき、2018 年 10 月には東京藝術大学

大学美術館で開催された『芸術の保存・修復 ― 未来への遺産』展に参加する機会も得た。

そしてこのプロジェクトは現在、名古屋大学に 2025 年 4 月にオープンした施設「東海国立大学機構 Common Nexus (ComoNe)」[2] で開催中の、企画展『COMMON NEXUS - “私たち” の遭遇 -』のファイナリストに選出され、展示に参加している。

会場では、成果をまとめた『the Male or Female』のブックセットの展示に加え、アンケートに協力いただいた方へ、性別を記した「チキンポストカード」を配布するという試みも行っている。あなたが手にしたチキンは、オスカ、メスカ。その小さな情報が、あなたのチキンを見る目を、ひいては日常の風景を、少しだけ変えるかもしれない。ぜひ会場で気になる一枚を選んでほしい。



Figure 4. 『東海国立大学機構 Common Nexus (ComoNe)』での展示の様子。会期は 2026 年 3 月までを予定している。

注釈

※以下に掲載されている URL は 2025 年 9 月 25 日現在の内容とする。

1. 生命科学や生命論の展開を参照しつつ、「生命」を巡る美学・芸術（バイオアート／バイオメディア・アート／バイオリジカルアート／生命美学）の実験・研究・制作を行なうためのプラットフォーム。2007 年から、早稲田大学先端生命医科学研究施設の生命科学の研究室内に設置されている。
2. 東海国立大学機構が運営する共創の場。名古屋大学駅直結の立地に、2025 年 7 月にオープンし、

名古屋大学・岐阜大学の学生や教職員だけでなく、近隣の方、子どもたちなど、すべての人に開放された探究空間である。未来の当たり前をつくることを目指し、様々な設備や多様なプログラムを通して、世代や領域を超えたつながりから、新しい交流や価値が生まれることをサポートする。

住所：〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

<https://comone.thers.ac.jp/>

飯沢未央（いいざわ・みお）

アーティスト、プロジェクトディレクター、そして『文化と生物学』ディレクター。動物や植物に限らず、生命の挙動や個性に興味を持ち、デバイスアート、パブリケーションなど、多様なプロジェクトを手掛けている。<http://iimio.com>